曙草帚 十七日丈

へ13
3049
5

00143

八、三十日

曙仮草紙

十九丈

大晦日曙艸紙 十七編 上冊

京山翁作 國政画

紅英堂上梓

大晦日曙草紙
十七編上
山東菴京山作
一壽齋國政画
十七編下

大義の物げぼん

十七編 下冊

さうし

京山作

玉政画

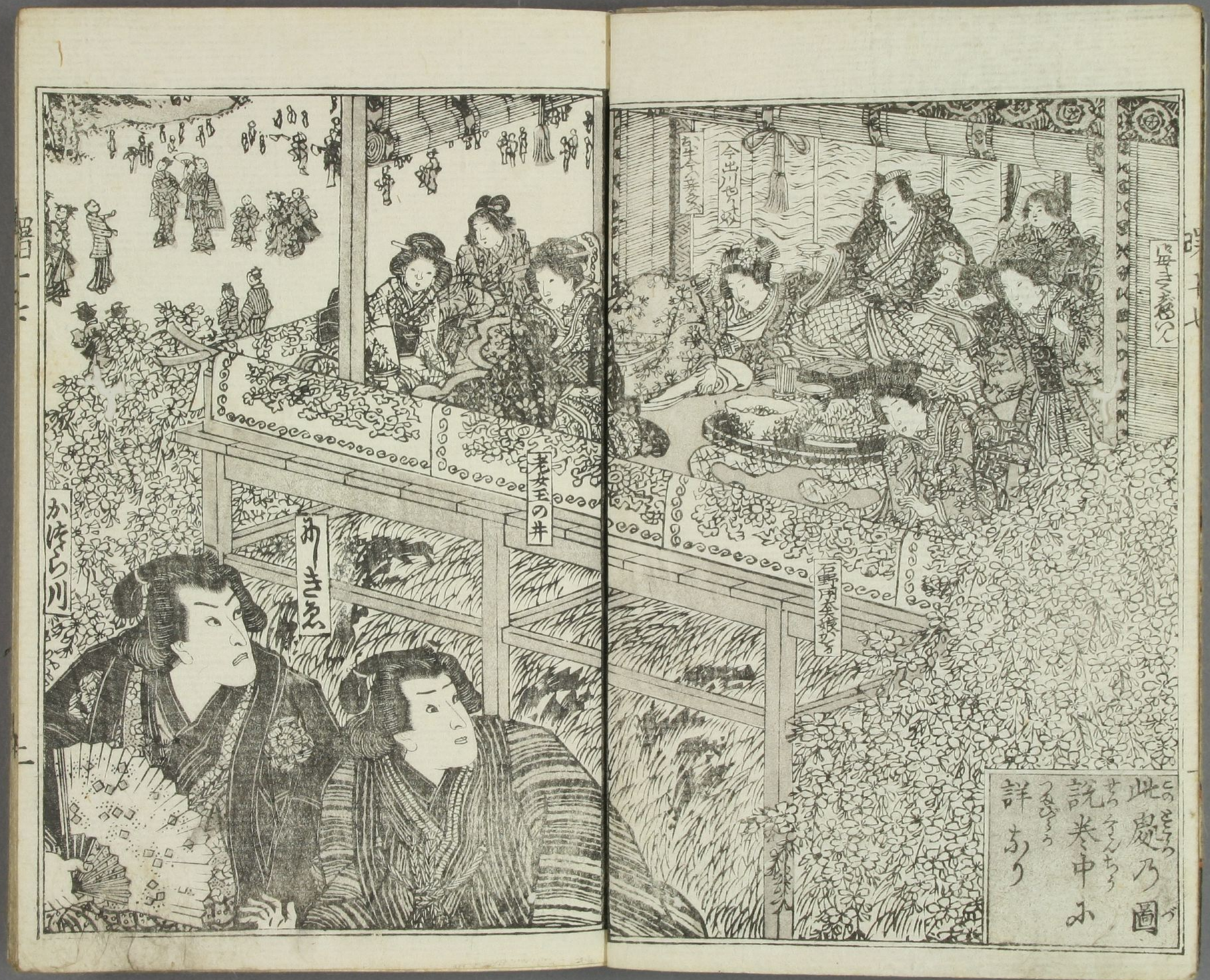
南傳一 萬吉板

壬子新鐫

此大晦日曙草子ハ天保九年戌の春櫻木ゆめしに
初花の初しをりハ八重九重の編を重ねてこゝも又
十七編ゆかたかぞへれバ十四年つゞく歳々の新刻貪福
貴賤の大晦日ゆかるさハ取尽しゝる掛ぶとの帳面ゆ
墨をひきぶゝ艸稿ゆ筆ハ毎ゝ趣向をはくゝ名ゆ
ゆゝ智恵をあぶり出る細糸ハ妊句の次の編種を
初露ゝゆめしを十八編の安産を以ゝ待ふ

嘉永四年辛未 仲春 稿本 八十三翁

京山人


かはら川
あきえ
女王の井
石野内蔵ノ介
此處乃圖
説巻中ニ
詳あり

大晦日あけぐれのさら十七編

初段

今で川どのゝおくへせんぷうのかつら川へと手一千七の角力ざうりをとぶらよくせんへうるが ことぐひんはやありうきのぶんだんな おやくつまのおうへやとうろ さんなおわかまでうねづよれ みじ弟子もおんせいある うつふめと伊豆の大家 くのらず且十六の そーおおある太ら助 とらのあのとのうまかく きうりせうのうえれ つ且きうじのちでうち たちとうさんと あるなかつら川目 きてゆく弟子わめらひ をきてぶらよれ ゆえとうをつけ七年のみれと ふたいまれ廿二才二段目の らちまでうわげらうつよきで うら川の名をもらくわ且をあらう とひともいかれど今且がかつら川わ うら子のでくひそうのでーゆそ 角力ゆへよまをるをきとぶうまう

関取
かつら川

㊁二人
かうひそせうをゆち うるをきぐらじけのとうまへ日

さ且がとをおそんか かめれ且ーぶさ をひとありて今で 川のおくへと うりそれと うくがえが るきれの 五百両 おくへの あてくきん ふ今で川より いできうろ 川より 弟子せ㊀

かつら川でし
二段目ふとの家

◀かつら川うえまろ きそけのへかつら川らせけ とうのとおえつでもまう でんの弟子ふくさ わまらせて わる女房 おるを ざられ より 「わく 今で川 さ家の松山 さあ七十七せうで めでてくおつとめ みされらん さよのおわねぐひ まちびよく まとおろうぐやも くさき且あと 中くの玉の井 さ家おろくらの おみろこびは おゆきえあぐろ ねべきうをそ そを且めーてへよろこびのつうひのあ ぎう志てうようぶきんせうかつら川らちらうひ

かつら川の妻
おゑみ

次へ

玉の井
関取うら川妻
おるみ

つぎは　はるのあけぼの

めでたくとし
おさまるなりそろう
とう玉の井がそーま
の下女ありろうおさまる
たんぐーをまてめつひを
かくしーまの井ぎあひ
ふたとうのあのよう
あろうんとろうへ
ろうぐうさを
のーあまあるあ
あるようとひの
つるひものもめらも
うんとようろあをの
あるくをのーろう

二段　そのふるの井
とのへの山井
ぢんうとのへの町いわを
あやぶんあるあるくろる
ちゆうあんのちまあ土ニ
さいのきたこそきくと
おどろあそのちぐ川
ありの水どのく母
きくーものうんどの㊀

㊁ いまごおくさま
あるしさたおふ
あるうあるあろ
二十四ねんの
ほそうとろあ
きをを
つるむ
ヒそーニ十
七さのうろう
ぢよのゆきそー

㊃ あのこころを・玉の井「とを」
あるるきのへのろ
でけへいあるうん
あらへの㊄

㊅ 「さゆうんで
どろう
きを
おひる
まを
あるあろ
まとや
でやり
まーさ
あるあ
うま
あるみ
せう
まを
・玉
の井
「を」
そ
ようを
あるの
さへく
あるさ
「ものとの
あんた

㊁

おみを

おみを

りろうれどさく
どのあるりーぢあを
まろ山ぐあとゆ
の水どのくらろぢ
るまれーの
まりゆを
るろへ
るまを
あるりろ
ろちりめ
つたちり
さたろさ
さろさの
くをとこ
さろへま
きろう「
めをさび
まーさ
まをろ・玉の井
「ろをとけをあるさを
のとーてあるさや
ろりの男ろ
「ものさあろで
どざろまを
・玉の井「ろーく㊂

きるまろ
またあのろへ
・玉の井「おの
たゆへのそけへ
ろゆまろせて
おまやトざへそん
ろで三人の下女を
つろへのにあるん
さるのあるげやどの
ちろ下女ひとり
ゆろくつろへむまあ
とてからゆ・ゆ
ゆろろろまるゆ
ゆりまをへゆろ
ろろへろのせろゆ
ちろをを
つまへ

三段
太郎娘
おちや
太郎奴

うつ川妻
かること
関取
かつ〻川

かるら川
かなみ

太郎助
太郎助後ちんや

四段

ゆたか

おみを

五段

お半ゑらみる
の太郎

うそ

つぎは

そもそもあれをのらんとやらんとてやどざんせぬ

かつら川「いつさるよろろもくもあさられいとふきさてろふたをふきこれいとえやとえをまそのつだいつぎの西ひろたいさのまこうでたがこうこうむゆるいもうろぐ者くひいきのごんるうろうのちとむれんひーらさぎぬのでこををまろきくげこまたうけて大がまくとめをあげるまるまげたるやーびゃろうきねてあっもゆたつたせたもりのどいきろやうたあろめるうろう

六段

とのあろ日ゆたありひとふきろうえいこまるひてのちちををゆたあをを「ゆふまをを「とをを」男せこいだいうふうわつけてふまゆろ女房のこをてるもしれきのくをゆめてわさをえやとををとのいのことをーをきゆいたうろまろあひうゆれつたゆよう「ゆゆつろあひあ旦をを女房ふゆちをぢのたろゆをゆひたをりてろうてをゆろあいををるひこるとうこるつぎへ

京山作　國政画

大晦日曙草紙十七編下卷

作者　吉見の口上
江戸京でーまんざ二十四
京でんでんを
「女まつりを公方
男大まんやく公方鬼
丹れうりやく一才五匁
半才二匁五分女の月
やうるうちの五十いやう
ろうもたろうむろうみあひ男のまもとりでく
ろもまんせのうろをふまるのちひで
まろべー「十三味茶あくひと
まるーやうふん水見粉一ちろ
百三十二せんらろうどのまま
まるうりやをの一ナどのちろ見べ
あんかん玉のごとー
・ふをびー・をびうを・をまうど
・まやゆう・ちびうみとまうまう
「ひうれのこまちさーまのあーろの
白牡丹下つを百二十四せん「むくぬた
おのちろーえろ和ーろのびーわうろ
「下つを五十六せんあせめ
あうろぜ半をろくうろぜ

七段　今戸川ぶちの

八段

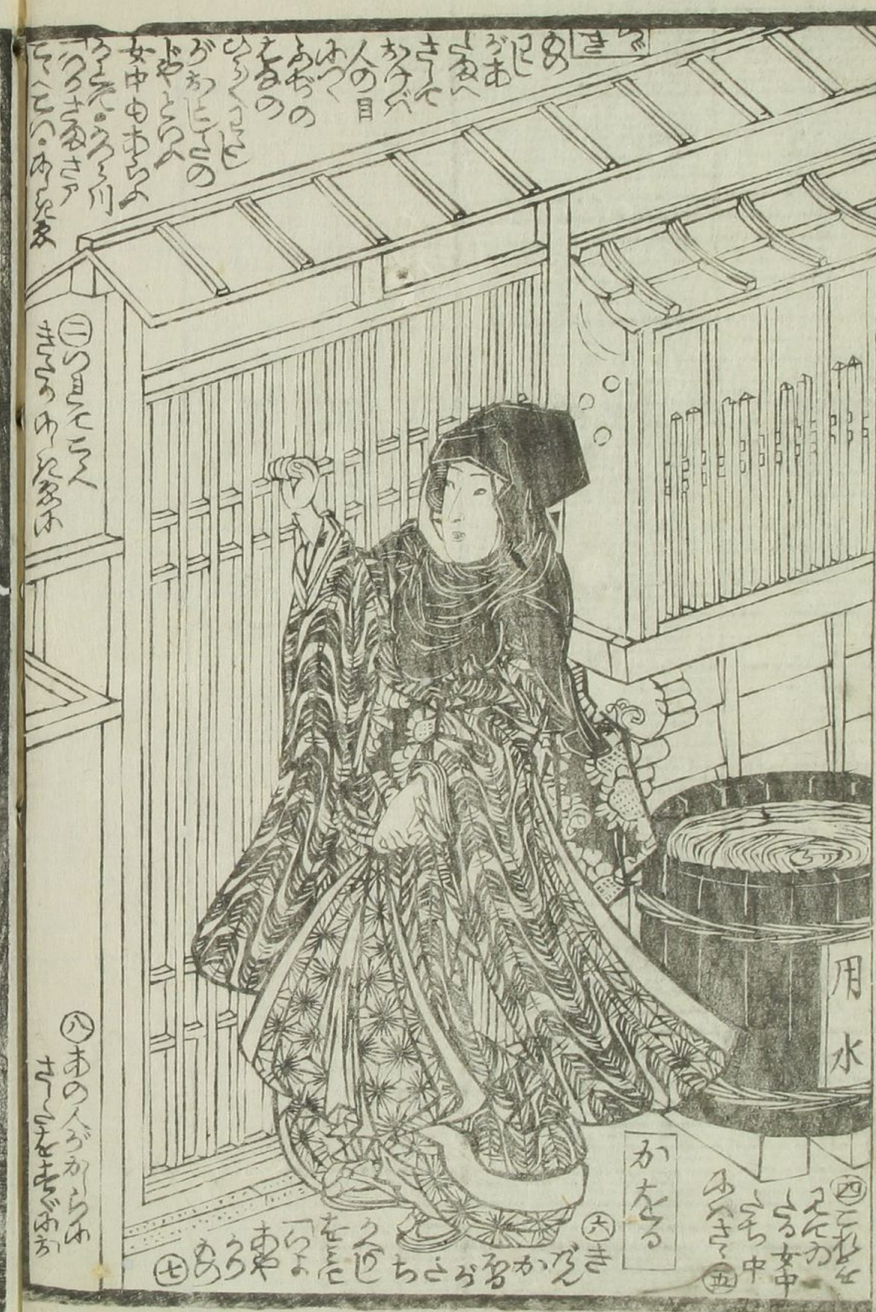
つた
きく
まちく
くるる
あづけて
むこ〜め
ありん
今のわろ
るゆゆも
きてそるのもとふ
ぐんてうひろくも
あるかのせろさのだや
やも一ぬでまふあへ
おゆうゆえぐ
せたるも
さをぐん
きせん
ゆうと
きせん

おどろ
ろあど
けさ女中ら大
あてあらぐて
あををたぐを
ぶつとうこのかたを
うつひらんぎる
あるつまこのさを
まる男の子女中ひ
はてそめるこ
あはべいるぐこ
そ〜えれ

つぎへ

おまさ
ころる
かをる
みたま
かつら川

其二
男ども

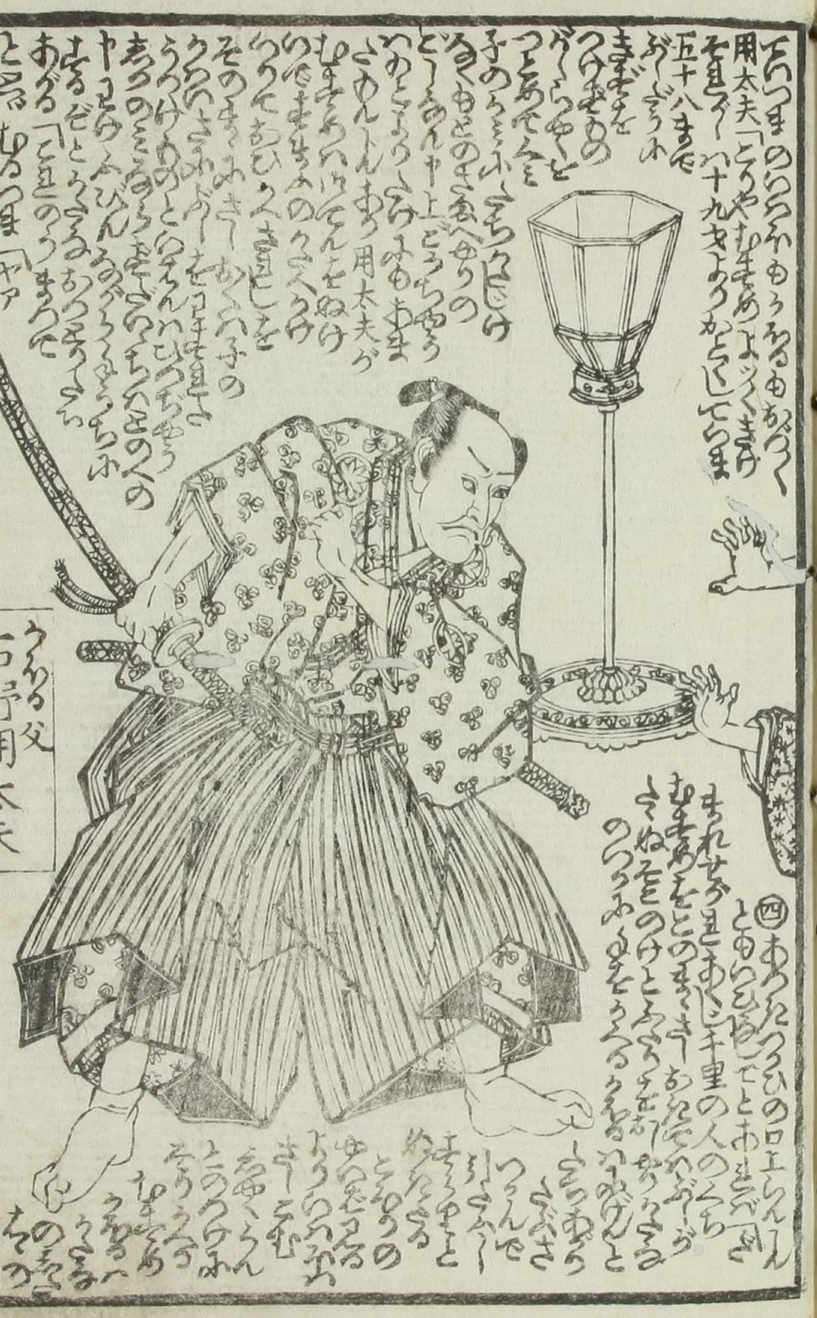

用水
かをる

ゆーたん
石ころ

九段
石うろ
みたらん
かるる

十段
かまくら
山右尾
かまくら
岩尾
木村
長助

かるる
丹下
山岩尾
玉の井ごろ


うるる父
石野用太夫

玉の井
用太夫

岩尾
丹下
かをる

土段
一日もそくちらぶ
とのそーも大晦日とうろぬちうろ
町ーや
七ふくらとちこぶがーや
ぎのもーハ三千こ
大ミそう正金のかりもざりうろくて
けのの大ミそうぶせひうさひびうろも
つまのむーら大らそのげーや
とのの女ろのめのうろ
いづだの千八編めそりろ
(二)かけそうがきくこうろまさうどめう人が
あつくろまぎとらいつせく「こうやか
まく二寸ものぎと「よくいこうろを
ろのぎこのく
ぎろくさみ
あひめめ
下女「めー
あっこさん
このあっこう
さうめのこを
でこちの
うちをか
ぎろをさ
まこめふ
ちろ
「えどん
きれ
きょ
はー
さ
あ
ぐ
ぎ
あ
ぐ
ぎ
あ
ぐ
ぎ

大晦日曙草紙

京山作
國政画

十八編
上集

嘉永五壬子春

萬吉叢行

尺田朗与妻

京山作
國政画

大晦日暑中紙
十八編下
歌吉
國政画
十八編上
京山作

大晦日暮れかゝり

十八編の下

京山作

国政畫

販元 紅英堂

峰女

須磨の浦浪よせくゝ八かゝ[illegible]あぐむ[illegible]ぐ家の
日益をかゝ[illegible]事をたゝぐ。二日 酔ふ新
年しくゝ人の屋めゝ[illegible]顔あぶらくのあくる川つゝ
ゝ八茶の椀と[illegible]て儀[illegible]の例る沈むを儀山[illegible]高
で見[illegible]する[illegible]機奴も[illegible]
かきあ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]の洗[illegible]れ入る目うえ
[illegible]も博[illegible]千[illegible]上の[illegible]
[illegible]も大晦り[illegible]十八編[illegible]茶を[illegible]

八十三公翁

山東菴識

天保四辛巳 秋上澣 子春軒板

今出川の家臣
石野の用人
娘小姓
薫
蛇嗅ふと
きけば
お拾ろ
猫子の
教

今出川の
由利の
之助殿
の妾
牛
家
在し
時は
信濃の
屋の
娘お
牛さん
らしく
鎌倉扇ヶ谷
今出川先侯の
妾蜥蜴院
同館の老女玉の井
角力取
錦繪

大晦日曙草子十八編

初篇十七へんよりつゞき

二段 長八

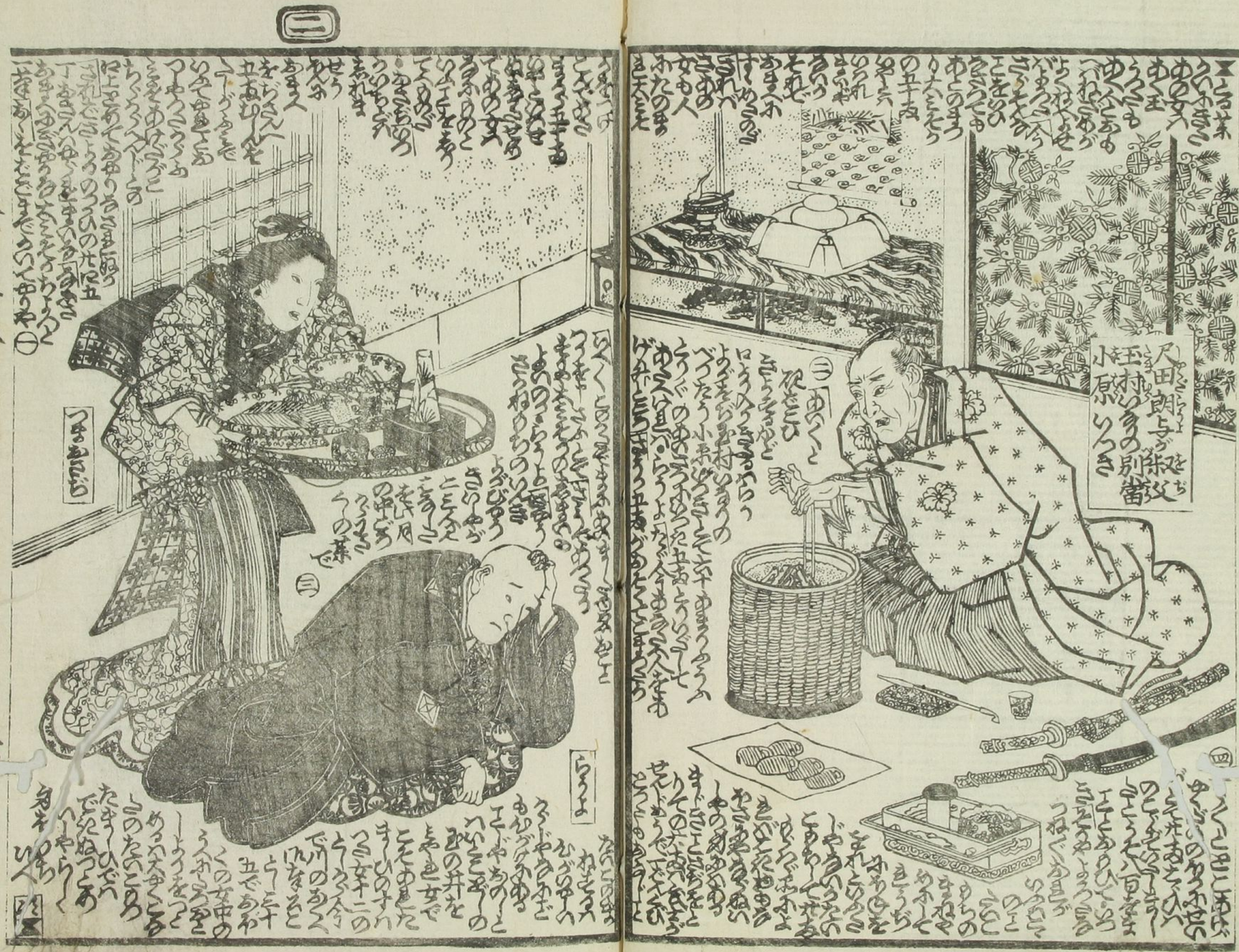
料理人喜八

尺田朝与

つまあきち

関取ろくろ川ごで
二段目の日錦繪
三段
(一)だんなかみ
(二)

尺田朗与子紋
玉村屋の別當
小原いつき



せきとりがわ
つまあらそ
あらいこれなんぢいふるーしみるお女さまひの今ぞいかゆりのぬどのあそんかふあるとおそうとりてあるこれをぬぐてくるとどもへ
此外さりの十二人ようそでまりてまりてくるとこれをぬぐてくるとどもへ
つくるりとされいたでまりようとまりさ見いすぢうちち
ひろくよそれもあふとあるあるーをくふしるる
ちくんそれいさそあきこれもあるぐたいそのの
秋せきとりかくりがだいどころの内でのの
すまりうひとりん大ぞふひでそばをうろ
ひとりうそばでそばをかるる下女いろまの
しをたく恵だりとのひろりをのへりのの
ふりつのさ大きふめいびつ三ろるびらりつきさ
ふまるあるふせりんひとりさねてあるみど
せたとりのしいくへるの
のろりこのびあるさい
のこふひとりの下女
とちのびあーるのや
のあるりろさんさあるへのや
やしあ行ととしたんとうの
れ殺ぬひんろとかざうふ
らこせるるふ者ぞ下女の者
かごおるるーきアとちらさとのふ
しるのやあるんが母あるるこふむふ三さくりあん
せきとりうりふ者の礼ぞひのあさろ
ありくあるんが母あるるこふむふ三さくりあん
でんあるのんの名ぞるるえあさんいんーことあるるー
くるさまあるりたのおりうまてーあるるこ
きりうぞるぞんせりうともことさりるんー
一
ーたのあるるあるるん

五月
ちうと

小まんさまとちう
ちうと
ちうと

小さわ屋ぜん
たゝ吉 義
らうよ
つまむさぢ

山東京山老人作
一寿齋國芳画
大きそろ十八

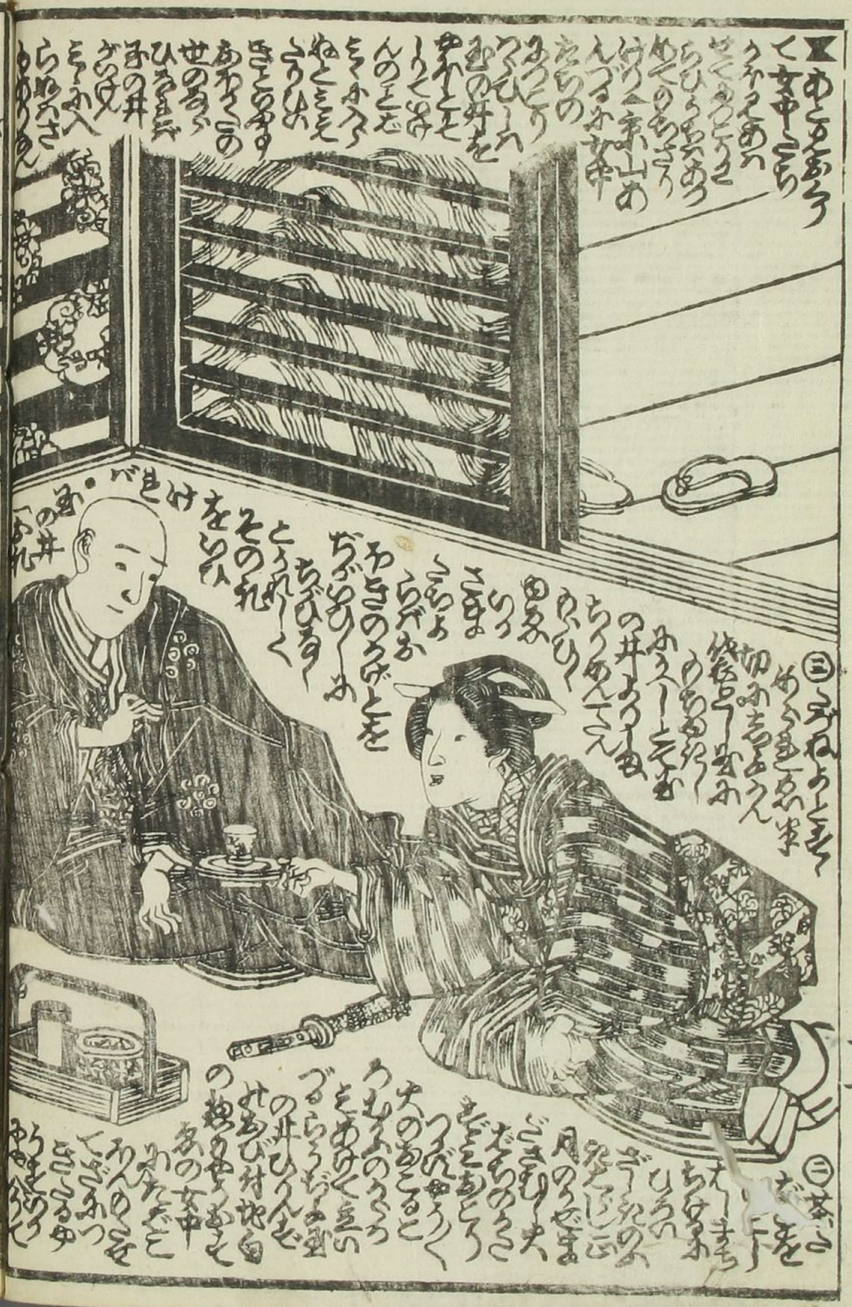
三
大晦日の夕ぐれの子十八歳
八股大きそろ
大井八兵衛
おゆく

大井八栄

あく

九段

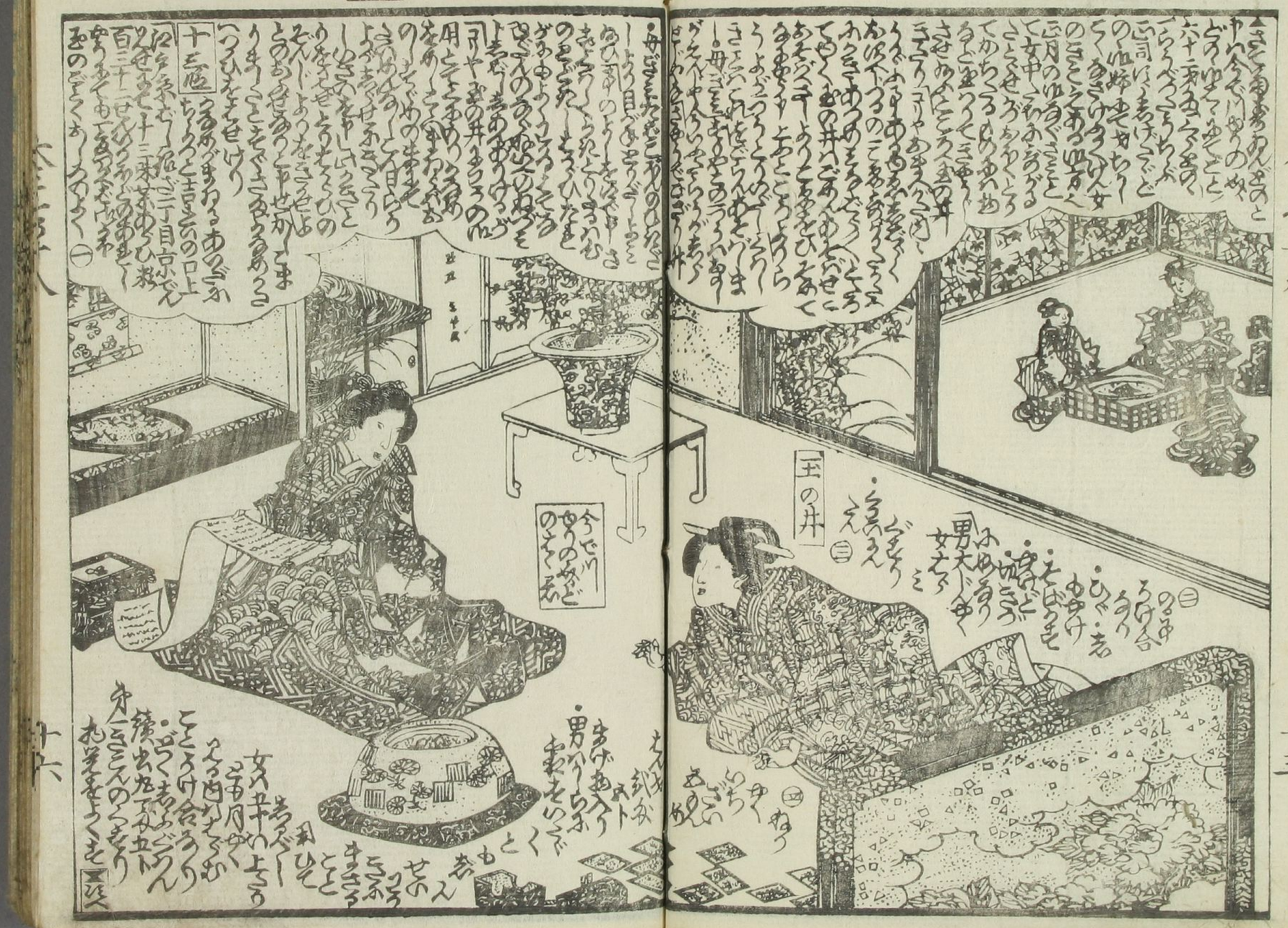
十段



十一段
らう女王の井

王昇
下女お初

らうよ
十二屋


玉の井
今でいうのみどのさくえ

老女玉の井
本文
出川長風
国守要人

玉の井下女
あそろく

玉の井
八ツ太女房
あそく

玉の井上女
お初
八大尊
あめく
十六位
ふと井
八つち
ふと井て二落
ふと井

老女房
玉の井
國安
由利の
十七段
十七段

京山作 國芳画

大晦日曙草子
十八編 完

二段目 終

嘉永五壬子春新鐫目録

大晦日曙草紙 七編 京山作 六編 國政画
新敷田舎物語 六編 一九作 七編 國輝画
一紹大傳 犬の草紙 十八編 仙果録 九編 豊國画
古今草紙合 七編 仙果作 八編 國輝画
御贄美少年始 六編 一九録 七編 國輝画
連理翅山雑奇縁 初編 西馬補 二編 國政画
侠客傳仇摸略説 六編 西馬譯 七編 八編 國輝画
富士額天人花七 二州 仙果作 芳虎画
嶋巡浪間朝日祭 三編 種員譯 四編 國輝画
春柳錦花四 三編 一九録 四編 國輝画
府郷御江戸繪圖 大奉書 六枚つゞき
大日本國郡輿地全圖 全 六枚はぎ

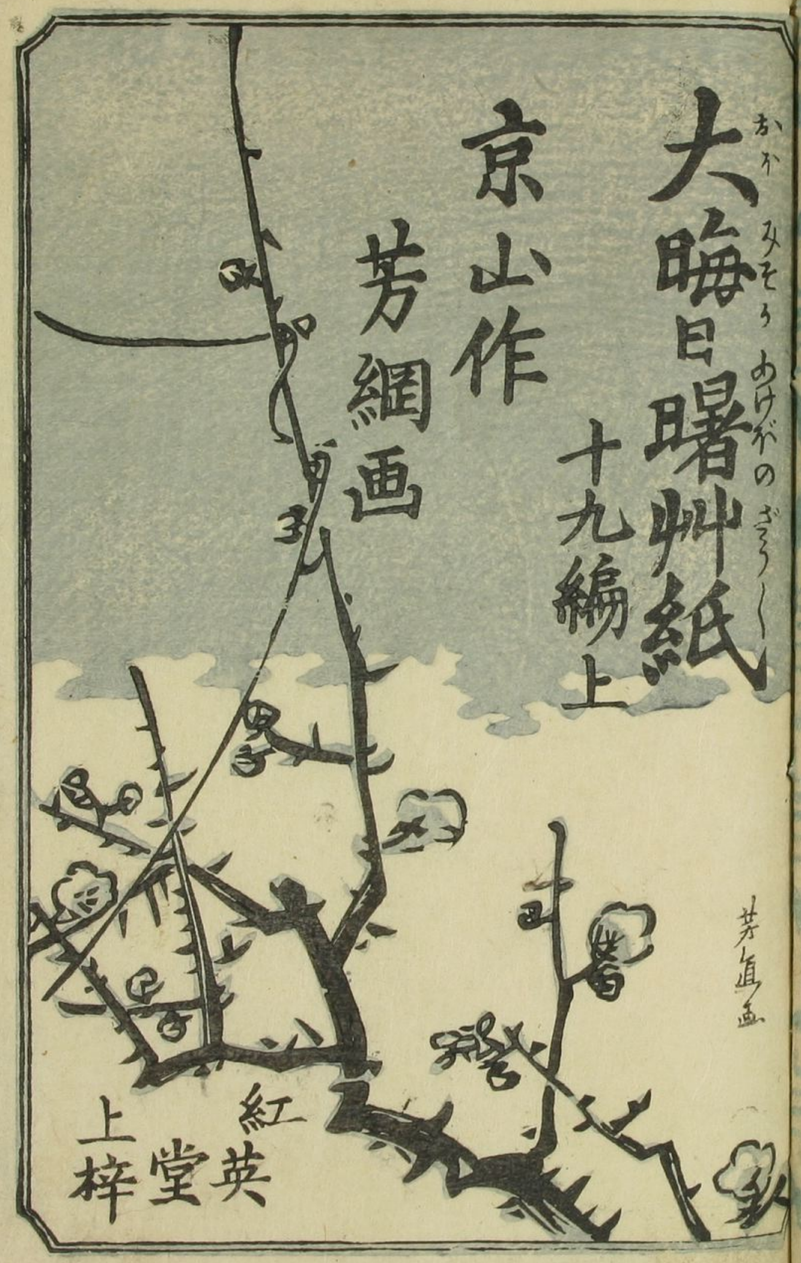
地本錦繪 東都南傳馬町二丁目 蔦屋吉藏

大晦日曙艸紙

十九編上

京山作

芳綱画



大晦日曙紙
一登齋芳網画
十九編下
蔦吉板
山東庵京山作
十九編上

京山作

晦ごもり

十九編下

南傳馬一 蔦吉 えん

芳綱画

○大晦日の夜王子いなりきつね火のもの

王子稲荷往古八岸いなりと
いひしを今号社ゆゑ王子
と岸稲荷とかゝり王子權現
縁起に曰「のぶ長の世ゆゑ市ヶ
谷社のかゝもとゝくいあり
いにしへより毎年晦日の夜
諸方の令下婦共社へ集り来る
其のさませる火のつゝをゆりつゝ
をくだくの松明をあぶるごとく
彩紙の雲を形もつくり作り
之を持て山をかゝえ何辺をかゝる
不同ことわりて明年の光を考ると

きこゆ　こゝ西ことあり　按ずるに寺社院ハ
康平年中よりの同社なれバ
数狐火ハおよそ七百年ばかり
今ゝ稀ざる奇瑞なりとぞ
よりてハ五子いはゆる天歳を
なるべし　狐火ハその制限年よりて
なやきうるおとなきすなる四名ことを
観人と者げ　奥あくうゝく一夜
やとりて観るべし　因家の人ハ
狐火ゝ目あれそめづゝとハ
おりふしなれど市中の人ハ奇現
なるべけれど除夜ゝかぞゝれる
すなとりしたもあれど
遠ゝまぶ
うゝと

初版

かをる下女
おまぎ
今で川のおく
おかあかをる

ゆう女王の丹

かたる下女
あさぢ

下女お夜
かもをる
女あさんど
二
らう女お井
お夜
三
お井
お夜
六

中らう五の丁
中らう屋の丁

ゆうの女
石野
用人夫
つぐき
くろ川べり
三勝の召使

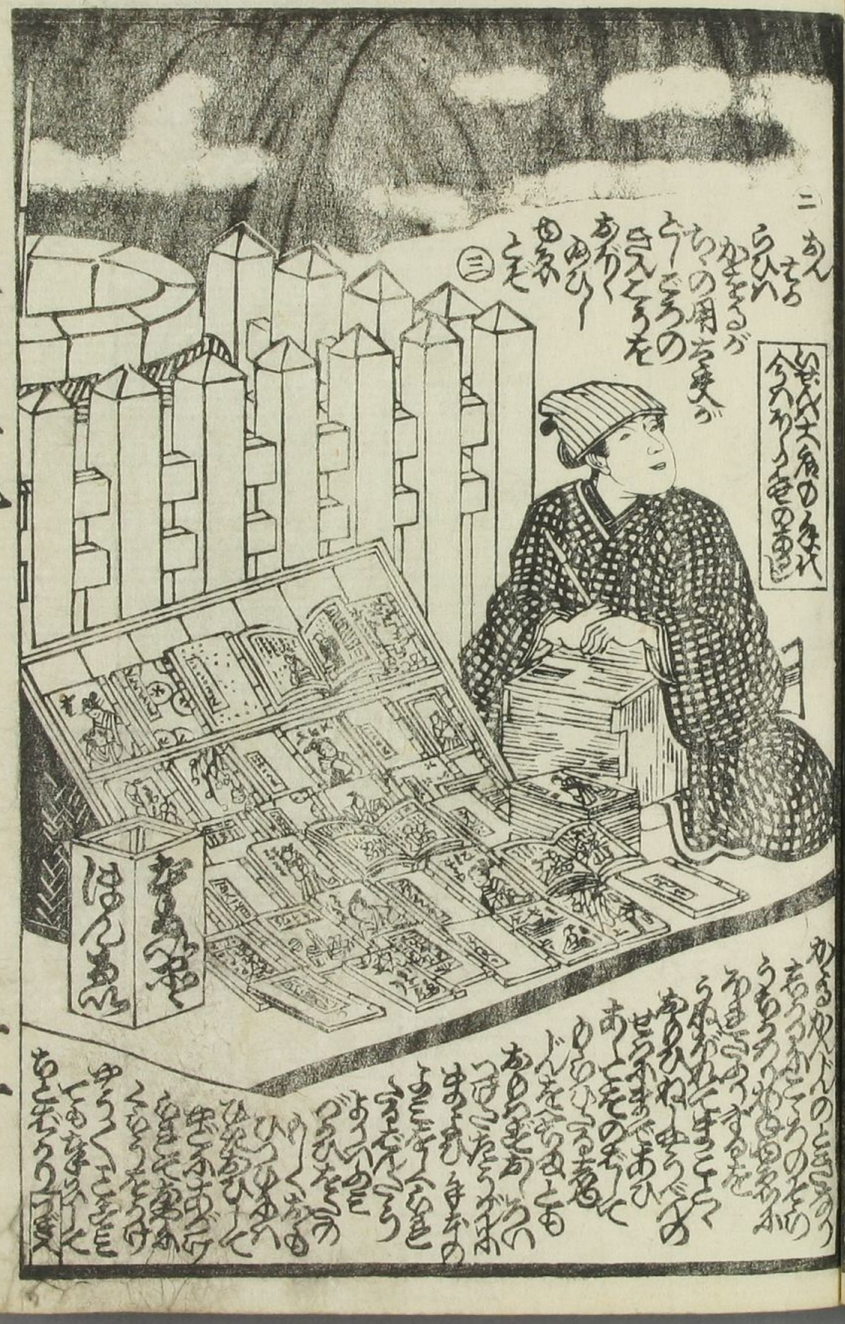
五段
五の井
石段
用太夫
由利の女
六段

玉の井

天田ひろよ

京山老人作
芳綱画
上の巻まき
板えほん

三
大晦日あけぼのさま
十九ぁんの下
七段



今川出入中
米百俵
錦絵東勝

尺田ゆうよ
用人夫婦
かそう
せきや
井

九 四
ゆうよ
ゆうよ
ゆうよ
井

井へ入

十九

十九

十二段

十三段

十四段

父
娘
母
らうよ

大時分
二十編
上の巻
京山作
芳綱画
紀英堂
上梓

芳綱画
京山翁作
歴世女性衣考四巻京山作上梓

大海日暮草紙
上
紅葉屋粹
山東庵京傳
一登齋芳綱画
什題曲多齋画
下

大海日記

京　山さく
らし　綱きく

孝子

孝子

孔安国子孫伝の序に父母不父子可以不子子可以不父と教へたる者なり

むかしの人は子のかたみ

父たらざるもの

京山印

大晦日あけぼの舟子廿編ろうえん

二段

はるのはらうよとのあハ
あやもりーやみてあるー
四あるりーやもこうーぬふてがくもんも
あるりさのちもすぐれーふかんどんの
どろぐのぐーぐふてせ二のとたより
ゆろさとふるひ男
ぶりもよくあまけふ
こあぐよくさとせんも
たつーやふひく四あ
人もあるりーろぐりのまも
あるりーろくーらりりく　とぐーぐを
うちつぐそふぐあやふりられ
うまれーゆいくーつきのうう
すあるーーむりーわえいその
けのーやあるーー　女だう
あさちをつきてあるまん
とちふひきうーまうちば
三ばかのことちば七ぶよて
らじしけるふこれんあとの
大ぐをろふあるせ大あるく
ぎくゆくをうーふ
かいゆ　ちまーる
四あ今でリ
ゆりのゆぐのく

四あり女ぐろあさちへりーん
ぐゆあんでこのよあさろあを
あの井へあぐとのひければ
らうよ
ころーきま
五

六ちゆそ
ぐん大ぐを
ゆうくーのうあーきこと
井へあぐむすめあゆの
八ゆくーくぐらを

あーたの
こうふあうて
一
あうーのありーやと
ありしあるたのことちい
やめていまでいりーやをせのでー
けるふまうちばへ上をせーれよう
大ふたあうーつきのうすあ
りーとめてげんうーんいうめ
くうちでーもきえんある
ら上ありあやうーくへ
十七へん十八へんをよーて
ちうーさまうー▲さそらうよへ
ことーーもめでーてもるを
むくけふへ二月三日
でーもーん今でリ
ぎくーのわんまのへ
きのくすうーけふへ二日八日
ゆーをとてあをようへ又
あぐふてゆーまきのふのうーまへらんと
つまのあさちーとぜんをおらーぐく
ざふーふをいーとひ下女ふぜんをもう
せーーとたちーーたの下女さうあだの
りちきーうたぐーの下女井へあまのりしとら
きうあをえまべたのふぐらーたうぐーゆあまぐひ三

たあうけーゆあ
たあのうねのうるふゆく
ところをかぐうーくのこと
十ぐあもちあいぜー
四あちきりのとうひ
むをあのあうふ五

たうけーゆあ
ふのさうあれその
きこあうんとのひ
けれべあさちきて
それへよくあさ
きーと
よろ
ひう
井
きも
らうよふ
へあ
あひく
あとう
くの
きをの
るへ
らぐく
けきく
ゆら
せう

三段

井へ来
あるを
たちてう
ければ
らうよが
つま「わるも
うつらく
あとの
さうあ
むすめでござり
ますねへらうよ「されば
かやうのうつくしい
うるのくるふやらまるまでうを
たすけてやるのが井へあがり
ひやうきふ　えまひて
こるふあのやうにうへ
孝かうそれのこあくど
あのもあるまちうあれと
いとこどもの今でハのうら
ちよをとあるあの井ゲタ女
四ふくうぐりうてえをてごらく
たをけくやうこのじゃナみ五八

食田屋ためうう

六　あらけぶくハ十五
こうねのとれまこうこ
あくまをせうトいこの
あさちいぜんたのその
けいーやありしあ
あくあるる
たのめ
ところ
ア女子
田のうち
えあが
あのををされ
まりこ
らうよ
こうこあと
をーせセト
いうきこ
ろハ
食田屋
たあ
あも
んげ
せられ

このこ月までのやくそくで
そのうこふあのむすめを
あづけうこと井へあがりうとして一

二　うさるのうう
それをきうて
さうあやのけいう
めがあとうの
十両もうせぎ
ねんーたのサうを
きでうとあをこ
するハのひんとあうひ
さうあやめがかきれ三

ねんーたのう
ううこ四

かうこを
たをけこの
じゃ・うまこどく
くををされまこ
あのうこでハぎ
きうちれあうら
五ア作うら

尺田いうよ

たあたうこうこ
かこと言かがう
ううこうくうう
つむぎしんつきの
つこいまきまう
あのしのあのこう
ざんすこうう
つむぎの
ちうぎ
きたこ
もち月の
あびあう
こうの
こうざこう
ふうあのそこあう
けたあたうがんぐ
あうこうハけうう
よあもあうこうの
ちうをしくあく
これもあむーこともあう又い
うらうよがあくられる今で川
どのハけたあたうこうの今ア川
用もたこ田あれあれハ好こ
あうふまうぐ「これあがいこ

[ぎ]つちざんあなたのくこれくたんあもごぜんよく
さてくこあさらいてまいる・たのもう「めも
ごぎうせんあちらいこうこ　たのもう所ろものの衆
丁どたすすこういらくを
させこのことはねんもいのあもうこうたろうちまのの
ところへいどりんをちりもりきあげーのわん
もいとれもあるのこやいいことがあるもあ
とのひあげくあこころよりをあるえせ
みてこへさけみもこのくてつませたる
かくこうきのうこのもこうげ「これハ
あさぢさんへあこっ　あ・あさぢさんハ
ありがたうこひらきこてあこををかくこ
「あるくー丁どりくてをうまーこ
りーどらうこまー・らうよをみこう
ハ、ァあどのりのこころのごああの
「あつよすきうせうあうさ・らうよ
「うまがたきうてあるーあくあばや
「あいこあさちがむうかあきみの
こうさーハちんこのかあがこだうこう
ごをあらくいりハうりがわんがのちゃうん
たうるあハをりもよ・さをちあをのませそ
きんをあまひあさぢハあくハ入る・らうよ
あたのここうあんでござり弁「のやわうどいあいが
きよねんのこれうらあめちがせこをせくもあちまくふ

[二]

こてもらひあされとのふてもゆやくくこうそうも
のまずかくぐつこハあるまのとあり（ど）あんぐらられ
四あるあまくねんこいのうちをーてあのでらこされこそ
ありらひあたのそれもあるあやちゆかくーてこざく
きのうまーこ・らうよ「それハこ考ーんあこ　かんーんいこ
まーこさうそくあうーませうあきこのでるもぐーもら
すぎうもあでこぎうまぜうこ「されハさあまくーやうら
や弁ぐさけのうへがうこハもあたきやう
いこーてもかくぐねうちハあんぐーられ弁
「のうさねこうもくーたあもづあされこく
こあんきよあされハよのハ
のたあ　あよめこさまも
あるこあやホトれこれ
たありのうちホうらうよがう
つまハこうきくこる女四あ
せんこて井会がうもち
きこうしこうちあん
あうあうやーて
すねりのハたうこのねあうこた
すねうちハふきのこうぜん
ぶりへ親たのけーあひあ
こうめホをこうハあハびのこうホあもかも　[二]

[ちもとあた]

[二]のーうのかが
ぶん（のせこりち
きこう・あさぢ
「あこたハふあつ
ウうヤか・なあこう
「これハこちさう
あさぢさんぜんやうん
たこーでるけ
ますぜ

四段

さてなあちこちへとちがいのくいのまえにかさりのりもひきとくさしてそうしはなをくけたるあを所のちいさい女をくさんあれさのちすくあくむぐくりんまうあをとものたるあを所をうとこうちいあぶらもけのでんよりいそうくてりつてあるわどあをたるあちこうふもしさのつまえようえかくをあらへぜーかりのあをりへすくいうでいをあのどうくぐぐわいあらいぐそのつもの月えの春ぎをつきまくちゆのもてんりのつ三

㊀ちいさいがてんしてあるわどありまいがこのまたをりさのちのさとこれ〳〵その一口をいたん〳〵けたるあちこう十おさのこれかあるえ㊂

㊃あえとて十のかあるこ〳〵りとためあを所ぐまこをまうかきこうしれ人目もあうけどたのあをひありけれべあえへかのどのつこう〳〵ものぶりかをひうまでえすくきのあちこうつものいこうとのちたちこうまこうりこのかたなをとの

㊄あたなあんやえかあをてひらきこれべかたんこまのあり日とこのかたしをたこしこうのこをからを下女のこかてこまの小ぢえありひあぶうこうまこうさかあこをやくこかどあかあかう

たわを所

ひきざーこうひうるのめのありさこかあえうあこ　なをあらんとあうかきこてひらきうてをかーかんぐーがかんとのひきざーくれてうちかけり

五段

かくてけりもられてあるこの二月の中ごうちあをぐうで今かまうあひでのあとをたあちこうへやきこうりーこうざんあきよねんのこれかえかあをあのけあをされこうござりまをうかこかーかーこかーこかーこ

多代十枚
こりゃ元吉殿

まろあひだ
合田屋たわら

つゞきそのことをイヤ
そうやあらぬまらしとれいこれ
ぎうよやトきてあんなんぐく
あのくらちさうけうきそこの
あんと月のでらそうふこと
よせいとまをやしとぎたため
ちくらうれくくこうしものまたわく
のごとくこれいけんのくくのちをうふこへ
義のちきくやもるひゝが男ぎうれう
金いあうたうまぬあへらんあるくしくど
とてろふまをまうあるぬあるあひひろどけのあたびを
あさぎたてふうこれ　のちいことさらあうのちたゞ
しく父のちくこさくふまをたつくものの
よるところくたなのかわたせのそたあもも
ぎうあてくまをうとふ孝ゆあのよあ
よあをろ　ゆとこうをたうぬるあく
ろもうらやこけうかるむさるやよあを
のちくあ孝の金田やたゆあうんいこくゆ
あいうちくこるるあぎちまのはきこのりふかんをさぬへ
あさぎたうきあくぎうれいのむものまぬも
いくくきあくよりあのまきそうこふあるへつ
あうう女たうそそくのちへまくそのをうけを
あきくぎをうけうだんををきらひくうだん
あのこくうふらあへざくしくのとまりく

人田ゆうよ

孝ゆたゆきう

のちくくくくをつけ今をを
きくまうこともあ
りけう
ゆるあのの
むすこくくこ
いけくらやを
そるるのめ
あるゆけなあ
きくへあのの
ひゞこへ人ふ
かうくてひと
ことのこちく
いゞにゞと
人のまこへ
ひとをこら
きああ
かふひゞん
たうちくふ
こゞゆあひ
よりへむを
このくふ
うしけ
むうう
ろ㊀

五勝

京山老人作

芳綱画

本文

大晦日あけぼのの外子廿編上終

大晦日あけぼのの外子廿編下

本文

つぎ
ゆらてうちんさけあとゑ
つゑ〳〵へづきんもそてだんん
ざいあとこゑる旅せ一武ぐ
きぐ白たありぢ〜まのト
女ゑまぐひつまづきてうぬうれの
あとたたよせておるふむうひ〳〵つさ〳〵へ
千代吉小のぶ母あ大
あのやいたさぐあつて小のぶをつきてきりり
まして さあうあつ〳〵てぐさいき
下女あいくといひつてうゆへ
いぶうくありひあぐらゆついうり
かくとうげられべたゆるうまぐ〜
くんぐげふあゆのまりをあるるを
小のぶ母あ大

よひこれもゆあうさゆあうアりゆ
ゆのぶをところりへあさうぬう
えこのありあされまゝさあんぞ
はちうひへおろくうろ
とのりてさうさどゆ
あされまゝ〜あるゆ
やとてまもまもぬ
いうさまつれいぶ〜ぶたりの
しゆあうへきくまひ母け
たのト
さうる
よめの
あらく
おあるゆ
ひあさまもと
九兵をよびれ
ありあさまませ
ちまさあをつさまの
おうまちうひうあしあらんたゆん
ゆへきらせさくあいこれとよとのよト
下女おさうづてうのあをを
ゆざーきえまやーけり
七郎
かくてなめちくさのでけゆ
小のぶつきえまやぶ〜㊀
つぎへ

つき　今ぢんさんあがあのでかされ
仕方気ふさこれつふ二百兄
ちづーあされてーさのまー
せてこれろとあっしやれど
出しものうーとこまー
四あとらあへおあこの
あるまうあおねへどざり
ませあとやたきびうとを
つくあさよ法で
とれ汐もよいのを
とあっしやつる四あ
せんくこあくとりよせ
まーていっすとうさうグ
あおひてよやどあろまー
てからこれあくろこんやいとへ
まるからいのぶをかせあろう
だんをあっしやりれあいやまの
ことけこのてをもしをつり
たものあるこうあさこせへ
けいしのたまねべんそさま
うけてそんあこといこーません
あれここせんぐたまねあらと
のひたくらあこをうきせるで
けあのひさひたけやうれと

三うれぬへひこひのきう
さうそくりやふ
こせませうこきだれど
たくこいうよさまれて
こートよびれるいに今
四あこらうよやどあく
きこうこのざーきふへうて
これべこのらこよたいこもち
七ろのとたあこの小のぶ
四あこれへ小のぶろくろ
たうきこのーめこらうよ
さまよあさこあさこんせん
こーの大ごんあこうこーの
ところあのてをさまこく
ほのうこでをうれ三

今田屋十べ

四　ヨへけへ
おこそき
こうまうこ
きうをとと
下女ふ
をちよ
くりませ

ごさんこうををこれべ
ひこひこれあうゆう
ゆく対てあうたあくこて
びつこうあくこうよべきこでも
りそでを・ゆ二ひこひのちをこて
おんあへうけてあこう
あされゆうこあうゆの
くたちがさあらくこと
まーたれども人を入をこへ
ねうくまーくあでごうり林ゆる
あやこあづれでまおのまーこたこへ
くふたゆのさこせんかこをりしもほのうこと
かんまんもりこーませうぐあゆ
きうをを対らきてかどのよあこうき
しはこうーせんのうへさ
いちくいひこあへできき
せぬふのへあまをこへまま
ごけやまきこまのあうわて
くごきこます　かゆ　ぐあるこてあ
のへいぬれこのやうれやをーいとふころ
かやうこうう後の柚あてあくたあちこ
あゆ四ふあまあくも入こてきのどくのあのひ
ここちらごちらごりつこもちごくこのよれも
あうびやさこせんもまどひこさこうぐまど四

尺四らうよ

かうゆくたご
「これいさこの
あこーや
ムまりたこ
ちうよせ
かうゆ対て
「これへ
こやひ
ろ六日三兵
あをるあ
ト　あト
あ

まきのあふて
ひこひをゆたひ
下女ぐもち
きこうる
うあこくひ
みてをを
あうりーを
こそたあちこ
らうよさあちよ
つこちくと四

亀吉
金田あたまくり

天田らうよ
天武幸
小のぶ母ちゃ

らうよ
千代宇小の次

ためち所
小のぶち

たあさま御はなのあらく
あぎりあんとつのみ御仙
たあさま御いりとなる

つき
みぐら
三ツ木仙
合点所

つき
ふうぞ

十位
山がつ
ありくの子のあに
食田屋
たあるん
おるん

たんきろう
右七
ぬんきよ
たんきろう
たゆまちまち

十一張
たゆまちまち

なんまうあそび
たゆたう

つまあらく
てかやためさう
十二版
大きたちの百両

嘉永六癸丑春新鐫目録

大晦日草紙 九編京小山作 西馬譯 北編 芳綱画

連理翅山雞奇縁 三編 西馬譯 四編 芳綱画

八犬傳犬の品紙 苗編 仙果録 三編ヨリ 豊国画 国貞画

松浦船水棹婦言 初 仙果録 二 三 国芳画

御贄美少年始 八編 九録 九編 国綱画

八重撫子東物語 初 仙果録 二 三 国貞画

侠客傳仁摸略記 八編 九編 十編 西馬譯 国輝画 国綱画

花蓑笠梅雅物語 初 西馬譯 二 三 国輝画

鳥巡浪間朝景 五編 六編 種員譯 国輝画

春柳錦花四 五編 一九録 大尾 芳綱画

鹽屋文正 大今草紙合 九編 十編 仙果作 国輝画

地本錦繪 東都南傳馬町二丁目 鶴屋吉藏板

嘉永七甲寅春新鐫目録

大晦日曙草紙 九編 京山作 九編 芳綱画

八犬傳犬の草紙 九編 仙果録 廿三編 豊國画 國貞画

御贄美少年始 十編 同 録 十編 國綱画

俠客傳小摸略説 十編 西馬譯 十編 同 画

烏巡浪間朝暮 六編 種員譯 七編 國貞画

連理翅小雜奇縁 五編 西馬補 六尾芳綱画

松浦船水棹婦言 三 仙果録 四 國芳画

八重撫子果物語 二 同 録 三 國貞画

花蓑笠梅雅物語 三 西馬譯 四 國輝画

小幡小平次物語 初 五瓶作 二 三 國貞画

文正 蟹屋古今草紙合 十編 仙果作 十編 國輝画

地本草紙 東都南傳馬町一丁目 問屋鶴屋吉藏板

陳情